

プラトーン『パイドロス』242b8-d2に対する註解

一 色 裕

一 Phdr. 242b8-d2の特記

我々が註解を試みる箇所は、対話においてダイモーンのお告げが間接的報告として物語られる(例、Ap. 31, Rep. 496c, Thet. 151^{d1})のではなく直接的な事件として生起するCorpus Platonium 中実質上唯一の箇所であり、ダイモーンのお告げによる魂の本然への立ち返りの具体的姿を一瞥する手掛りが与えられている貴重な部分である。この部分是对話篇の始めからほぼ三分の一の地点に位置し、魂の立ち返りを介して *manic* 概念の転換をはかることによって、対話篇全体にひとつの転回点をもたらしている。

二 本部分の梗概

(イ) ダイモーンの合図がソークラテースに臨んだ際に神が与えた否定命令と、ソークラテースによるその命令の解釈。

(ロ) ソークラテースによる自己が特異な *advers* (巫者) であることの表明と、魂一般へのその表明の拡大。
(ハ) ダイモーンの合図がソークラテースに臨む前の、超越者の魂への干渉と未決の事態を前にした魂の動揺。

242^bg ἐμελλόντων ἀραβέ, τὸν ποταμὸν διαβαίνε(ν)⁽²⁾ リュシアスの演説の方法的批判を介して、彼の演説をこの上なきものと信奉するパイドロスを手順を踏んで正しい方向へ誘導するために第一の演説を始めたソークラテースは、エロースに就いての逆説がアポリアとして凝結しようとした時に、自らとしては語ることを止めその場を立ち去ろうとしたことを意味する。ダイモーンの合図がなければ、彼は第一の演説を行なった場所を去りパイドロスとの対話を中断してしまつたかのような戯曲的構成をプラトーンは与えている。ソークラテースのリュシアス批判の一般的定式の限りでは (cf. 235^e - 236^a)、第一段階では εἰθεοὶς (着想・発見) ではなく διαθεοὶς (構成・配置) に於てリュシアスの演説を凌ぐ所与の命題のよりよい証明を示し、続いて εἰθεοὶς に於てもリュシアスを凌ぐ演説を語る順序を踏む意向をもっており、その限りでリュシアスの演説の仕立て直しとして実際に語られ始めたソークラテースの第一の演説は第二の演説の準備のように思われたが、実際に不本意ながらパイドロスを誘導するために自覚的に迂路を辿り始めた時、既にソークラテースは第二の演説まで語る意向はもっていない⁽³⁾。第二の演説は、ソークラテースに第一の演説を語ることを裁可していたダイモーンの勸告によってソークラテースに対して新たに要求される。そして第二の演説は第一の演説を浄めるものとして語り出されてゆく。

242^bg τὸ δαίμονιον τε καὶ τὸ εἰωθὸς σημεῖον] τὸ δαίμονιον quasi-substantial use⁽⁴⁾
Euthph. 3^b5 τὸ θεοῦ 151^a4 にも見ら出されるので、二番目の定冠詞 τὸ は B T 写本どおりに読む。「ダイモーンの合図」に就くこと、τὸ δαίμονιον, τὸ δαίμονιον σημεῖον (*Rep.* 496^c4), τὸ εἰωθὸς σημεῖον (*Euthph.* 272^e3), ἡ εἰωθούσα μοι μαυρικῆ (*Ap.* 40^a4) など⁽⁵⁾プラトーンは文脈に必要な範囲で語を使

わけており、定義的に一貫した用法を守ることに意を用いなかったと考えられる。⁽⁶⁾ ここで大事なのは、*τὸ δαιμόνιον* が *τὸ σημεῖον* として把握されていることである。

242^{c2} *τινα φωνήν*「ダイモーンの合図は視覚ではなく聴覚、それも沈黙の状態に於いて内的聴覚へ訴えるものとして把握されてゐる。」

242^{c2} *ἔθοφα ἀντίθετον ἀκούσαι*「ダイモーンの合図が臨んだ (*ἐτίθετο*) のは事実だが、禁止の声は「聞いたように思った」に過ぎない。⁽⁷⁾ ダイモーンの合図は情報としては内容の薄い禁止命令として現われるから⁽⁸⁾ *ἤμε οὐκ ἐγώ* 以下には合図に対するソークラテース自身の解釈が入っている。我々は、ダイモーンの合図は立ち去ろうとしたソークラテースに「この場を去るな」とだけ命じ、そこから罪の予感に戦っていたソークラテースは神的存在に対して罪を犯した自分を浄めねばならないと了解したと考える。従って *ἔθωβον* 以下 *εἰς τὸ θεῖον* までを合図に対するソークラテースの解釈であると判断する。

242^{c3} *ὡς τι*「イピュコスの詩を借りて形象化されている、ダイモーンの合図が臨む前のソークラテースの心の予感に既に罪の動機が認められるから、ダイモーンの合図はかかる罪の予感に既鞭を与える働きをしている。ソークラテースにとって罪の自覚は何ら怪しむところではない、⁽⁹⁾ 更に *μαρτυρή* の働きによって自分が罪を犯していたことがわかったと彼は繰り返して表明しているから (cf. 242^{c6, d2})、否定命令のソークラテースの解釈にはエイローネイアも含まれていないと考え、テキストの *ὡς ἄν* (ブロクロス・バーネット) は BT 写本どおり *ὡς* と読む。

242^{c3-4} *εἰμιῖ ἄν οὐν μαρτυρίας μέν, οὐ πάλιν δέ ἀποδοχίος*「超越者が自己に臨んで *σημεῖον* (合図・印) を与えたことと、その *σημεῖον* が *σημαίνεω* (指示) していることが自分にわかったこと、即ち神的意志の自己への介入とその解釈の二つの出来事から、ソークラテースはかかることを行なった自己を *μαρτυρίας* (巫者・予言者) と呼ぶ。ダイモーンの合図は自己の現在の境位を悟らせ、何をすべきかを問

接的に教える内容をもつものであった。それゆえ神意を伺うことによって人がどのような運命に遭うかを告知する人 *μάυτις* にソークラテースは自己を準える。さて、Corpus Platonium に於ける *μάυτις* の用例¹⁾は以下の三種に大別される。(一)予言の神アポロンを指す例 (Chrm. 164^e, Leg. 686^a)、(二)予言を司る職業的巫者を指す例 (四十例にのぼる)、(三)ソークラテースが ausdrücklich に自己を *μάυτις* であると言明する我々の箇所 (Phdr. 242^c) の例。我々は *μάυτις* の語を限定する οὐ πάυ δὲ σπουδαίος (あまり有能ではないが) の一句にはエイローネアが含まれていると考え、ここにアポロン神に対してではなく、²⁾職業的予言者に対する素人 (*ἰδιώτης*) としての特異な *μάυτις* の自覚の表明を見る。では職業的予言者と素人の「予言者」とはどこが異なるとソークラテースは自覚しているか。神意の告知を受ける点では両者は共通しているが、ソークラテースがかかる神意を命令として自ら受け入れそれに従う者であるのに対し (Ct. 242^{c5} ὄσον μὲν ἐμαυτοῦ νόνον ἰκανός)、職業的予言者は命令を自ら発する者でもなければ、命令に従う者でもない、単なる命令の中間媒介者である。職業的予言者は生起するであろうことの徴を他人に伝達することはできても、伝達する内容を認識することはできない³⁾。それは彼が何のために命令が発せられたかという目的を自覚することなしに、他人の発した命令を伝達する取り次ぎ人だからである⁴⁾。従って媒介者の内では命令が命令として充実することがない。しかし *μάυτις* としてのソークラテースはダイモーンの合図が臨むと同時にその解釈を行ない、「この場を立ち去るな」というダイモーンの命令から自分が神に対して犯した罪を自覚している。ソークラテースが自ら合図を受け、かつそれを解釈することができるのは、命令が何のために発せられたかということを認識するための目的構造を自覚していたからである。彼は第一の演説をしている間、神々に対する咎めから心安らわぬ不安な思いにかられていた。この思いを晴らすためにはどうしたらよいかというアポリアからの脱出の願いが命令を命令として自覚させる目的として機能している。この目的構造の内に否定命令が置

かれた時、「立ち去ってはならない」という命令は「犯した罪を購うために立ち去ってはならない」という形に直ちに充実する。その意味では、田中美知太郎の指摘するとおり、¹⁵ダイモーンの合図の解釈という *μαρτυρίας* の仕事は既に咎めの予感から始まっている。従って *μαρτυρίας* はダイモーンの合図が臨む前の予感とダイモーンの合図の臨在とダイモーンの否定命令の解釈という三つの契機から成立している。

242^{c7} *μαρτυρίῳ τῆ τὶ καὶ ἡ φύρη*] ソークラテースの存在を介して、*μαρτυρίας* の座が特殊な職業的巫者から類的な魂一般へと転換され、ここに魂の在り方に就いての一定言的表明が成立している。凡そ人間は外から他人の教授を俟たずに自ら神授の狂気 (*μανία*) を介して、¹⁶超越者を仰ぐことによって事を予知する能力 (*μαρτυρίῳ*) をもつ。この一句は、これまでの議論に於いて悪しきものとして位置づけられてきた狂気の概念の価値転換をはかるための伏線・予兆となる。

242^{c7} *ἐμὲ τὰδ ἑθαίε νέυ τὶ θάσσειν* という単語はブランドウッドによる限り *Corpus platonicum* に四例あり、¹⁵いずれも探究がアポリアにあって然るべき *λόγος* が獲得されていない状態、語られるべき *λόγος* が語られていない不安定な状態を *psychological* に表現している。かかる重圧は知を探究する魂がかげられているのであって、魂がかけているのではない。従って *ἑθαίε* の主語は *τὶ* であり、*τὶ* とはダイモーンの合図へと充実しうるが、未決ではっきりとした形をなすに至っていない予感におぼれく *le je-ne-sais-quoi* ¹⁶ である。 *θάσσειν* がその縮約形である *ταράσσειν* の意味に就いては、ドッツによって次のような説明が与えられている。 *ταράσσειν is regularly used of supernatural interference.* ¹⁷ 従ってここで *ἐμὲ* と記されている *φύρη* は、魂の内を魂を超越するものに対して開かれた性格をもつ部分、¹⁸ *μῆ* を意味していると思われる。

242^{c8} *καὶ πάλαι λέγουρα τὸν λόγον*] ダイモーンの合図は、ダイモーンがソークラテースの行為を裁

可している限りは沈黙している。²³ ソークラテースが心に咎めを覚えつつ動揺しながらも第一の演説を語り続けたのは、ダイモンがソークラテースに語り続けることを裁可していたことの證しである。ここに第一の演説の存在意義を考えるための手掛りがある。第一の演説は知というものが知っている人の魂の在り方から離れない地平で常に思索するプラトーン²⁴の哲学に必然なひとつの迂路とみることが出来る。

パイドロスが自ら紹介したリュシアスの演説は、エロースの愛を抱く人 (*εραρται*) が愛人を奪い合う状況の中で、病い (*νόσος*) ではなく思慮の健全 (*σώφροσυν*) の勧めの形でかかる愛をもたない人 (*ο μη ερως*) が愛人にとって好ましいことを一般論の体裁で立證するという逆説的構造をもっていた。他方、かかるリュシアスを信奉するパイドロスは、言葉の量の豊かさがそのまま質の高さの保證となるような、言葉の価値に於ける量と質の同一視を行ない、更に *νομος* が魂の内に植えつけられるのではなく、物品のように売買伝達されるかの如くに考えている。かかる知と断絶した *νομος* 観の持ち主には、リュシアスの演説の価値の善し悪しを根拠をもって判断することはできない。従ってソークラテースは、かかる人物に対してリュシアスの演説の価値の全面否定を公言することを留保し方法論的に迂路をとる。彼は先ずリュシアスの演説の着想 (*επιχειρηματα*) はそのままに構成 (*διαθεσεις*) を改善することによってリュシアスの演説の趣旨を浮き彫る形で逆説性を提示し、この仕立て直された演説によってパイドロスを誘惑し今彼が信奉していることをアポリアへ追いこむことを狙う回り道を半ば自覚的にとり始めたのである。この第一の演説でリュシアス及び彼を信奉するパイドロスもっているエロースの觀念の偏狭さがアポリアとして凝結するまで、ダイモンは敢えてソークラテースに *διαρρηξια* を犯させ続けたと考えられる。²⁵ ダイモンは第一の話を終え立ち去ろうとするソークラテースに立ち止まることを命ずることによってこの *διαρρηξια* の *λόγος* による浄化を要求し、ソークラテースはそれに応じて第二の演説を語り出す。

242 c8 ἐσοσασούμην」]「気が気ではなかった」とはダイモーンの合図が臨む前の前駆形象が魂に及ぼす干渉に対する魂の応答を表現する語であり、αἰσχύνω (恥)に通ずる本来的ピュシスに対するパトスを表現している。このパトスは *αἰσθημα* として自覚される以前は、イピュコスの詩の一節が *Metaphor vive* として生まれてくる形で形象的に把握されている。

242 c9-d1 *τι παρὰ θεοῖς ἀγχιῶτων τινῶν πρὸς ἀνθρώπων ἀνείδω*]「アプロディーテーの子エロースが盲目的欲望に眩めて語られるエロースに就いての第一の演説に於けるソークラテースと神々、ソークラテースとパイドロスの関係がこの一節に示唆されている。²⁶⁾「神々の許で罪を犯すことによって、その代償として人間から誉れをうることになりはしないか」というソークラテースの不安は、エロースを眩めて語った限りではそのまま現実になった。しかし、彼がエロースの愛を抱く者の害 (*βλάβη*) を語るのみでエロースの愛をもたない者の益 (*ὠφελία*) に就いては詳説することを控えたのは、²⁷⁾その語の目的がリュシアスのエロース観の偏狭さを明かすことであつたからである。必要以上に語ることはただパイドロスを喜ばせるに過ぎない。

補註

- (1) プラトンの著作の表記法に就ては、Liddell, Scott & Jones. *A Greek-English Lexicon*, Oxford, 1940⁹⁾に準拠す。
- (2) パイドロス篇の行数は作品名略号を省き、数字のみによつて指示す。テキストに「」は一頁、J. Burnet 編 *Platonis Opera*, vol. I, Oxford, 1901 を用ふ。
- (3) *Phdr.* 237^a4 *ἐγκαλυφάμενος ἐδῶ, ἵν' ὄτι ταχιστα διαδάμα τον λόγον καὶ μὴ βλεπων πρὸς αε ὑτ' αἰσχύνης διαροδοῦμαι.*
- (4) J. Burnet, *Plato: Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Oxford, 1924, p. 96.
- (5) W. K. C. Guthrie. *A History of Greek philosophy*, vol. III, Cambridge, 1969, p. 402, n. 1.
- (6) メノン篇に於けるプラトンの同様の語法に就て、加藤信朗、「プラトンの知識論」、『教育思想史』第一卷「古代の教育

思想、東洋館、一九八四年所収、一六七頁、註二十六を参照。

- (7) 田中美知太郎『ソクラテス』、岩波書店、一九五七年、九十一頁。
- (8) *Phdr.* 242^c1 *dei dé me éptaxei ð au méllw práttew.* cf. *Ap.* 31^d2-4.
- (9) *Phdr.* 242^d1 *ti para theos ámbalakw twn prws ánthrwpon ámeíψa*
 デイノソンは罪の自覚の句を導入する *ws ðñ* の *ðñ* の *ðñ* の *incredulous* に響きを認むべき *ws ðñ* かかかせるニヤニス
 を *ws ðñ* 毎本の *ws* に換ふべく *ws ðñ* を支持するに難くない。 cf. J. D. Demiston, *The Greek particles.*
 Oxford, 1934, p. 230.
- (11) L. Brandwood, *A Word Index to Plato*, Leeds, 1976
- (12) 古代註釈家クルマイノースはこの解釈を云ふ。 cf. ed., P. Couvreur, *Hermiae Alexandrini in Platonis*
Phaedrum Scholia, Paris. 1901/Hidesheim, 1971, p. 70.
- (13) *Men.* 99^d1.
- (14) *Plt.* 260^d6-8 *tò κηρυκικὸν φῶλον ἐπιταχθεὺτ' ἀλλότρια νοήματα παραδεχόμενον αὐτὸ*
δεύερον ἐπιτάττει πάλιν ἐρέοις.
- (15) 田中美知太郎、前掲書、九十三頁。
- (16) *μαυρεῖη* 卽 *Phdr.* 244^c に於て語源的に *μαυία* の由来たるを説明するべき。
- (17) *Phdr.* 241^a3 *νοῦν καὶ αἰσθησύνην αὐτ' ἕρωτος καὶ μαυίας.*
- (18) *Phdr.* 244^a7 *τὰ μέγιστα τῶν ἀγαθῶν ἡμῖν τίττεται διὰ μαυίας.*
- (19) *Th.* 187^d1. *Phd.* 86^e5, *Prm.* 130^d5, *Phdr.* 242^c7.
- (20) Platon: Oeuvres complètes. Tome IV-3, *Phédre*. Texte établi et traduit par L. Robin, Paris,
 1933, p. 28.
- (21) E. R. Dodds, *The Greek and the Irrational*, Berkeley, 1951, p. 51, n. 3.
- (22) 山田皚『『ソクラテス』における『ソクラテス』の意味について』、『中世思想研究』、二十七号、一九八五年、九頁。
- (23) 山田皚、前掲論文、十四頁。

(24) 加藤信朗、「知と不知との関わり」、『理想』、六〇一号、一九八三年。

(25) イピュコスの詩に託されたソークラテースの心の予感に認められる罪の動機は、ダイモーンの干渉によって生まれたものであった。ダイモーンはエロースの価値を貶める方位をもつこの話を忌避すべきものと観じたが、バイドロスに対する教育的効果の故に、ソークラテースに語ることを裁可していたのである。

(26) W. H. Thompson, *The Phaedrus of Plato*. London, 1868 / New York, 1973, p. 37.

(27) *Phdr.* 241^e 5-7.